

## 「JENESYS2.0」中国大学生訪日団第12陣 参加者の感想（抜粋）

○ 日本は経済、文化、工業、科学技術が高度に発達し、日本人は礼儀正しく時間を守り、熱意にあふれ民度が高く、強い責任感を持ち、きれい好きで、些細なことにも気を配る。風景も美しく人に優しい環境である。

日本の伝統音楽を守る姿勢には敬服する。サントリーホール、札幌コンサートホール Kitara、パシフィック・ミュージック・フェスティバル、東京藝術大学奏楽堂の見学や学术交流を通じて、その精緻で人に優しい設計に感心した。例えばサントリーホールのピアノせり、ピアノの表面の特殊加工、シャンデリアの葡萄のデザインや音響効果の重視、有名楽団のサインや記念写真、指揮者やアーティスト本位に考えられた設計（床・距離など）、東京藝術大学の上下可動式オーケストラピットなどである。また、北翔大学や音楽に関するセミナーでは、日本人が自国の伝統文化を重視し、継承していこうとする姿勢を感じた。さらに東京藝術大学やパシフィック・ミュージック・フェスティバルでの素晴らしい演奏には大いに視野が広がった。どの演奏家もプロとしてのモラルや心構えを備えており、大変勉強になった。また、ベルリン・フィルハーモニー・ブラス・アンサンブルによる北海道の中学生への金管楽器クリニックでは、日本が広い視野を持ち、中・高校生の総合的な資質を重視し、学校音楽教育において系統的な育成を行っていると感じた。

日本は民度が高く、公共トイレのペーパーやウォシュレット、「音姫」は言うに及ばず、パシフィック・ミュージック・フェスティバル終了後の会場の芝生にごみ一つ落ちていなかったことは、とても印象的だった。そして日本と日本人の礼儀正しさ、民度、文化文明には、これ以上に感心させられた。チャンスがあればまた日本に来て、こうした活動に参加したり、旅行したりしてみたい。

○ 最も印象に残ったのは、パシフィック・ミュージック・フェスティバルのオープニングセレモニーである。野外コンサートは初体験だったが、クラシックを気軽に楽しむというこのような手法にとっても惹きつけられた。しかもこのオープニングセレモニーでは、世界トップクラスのプロだけでなく、年齢層も様々なアマチュアグループも混じってすばらしい演奏が披露され、この催しの理念が体现されていた。さすがはクラシック界、音楽教育界における一大イベントである。また、コンサート終了後の広い芝生にごみ一つ残っていないことは驚きだった。日本人の民度の高さと清潔できれい好きな生活習慣を垣間見た。

今回の訪問の思い出はたくさんあるが、紙面に限りがあるし、一つ一つ詳しく書くことはできないので、その中から音楽に関する事柄を挙げてみた。帰国したら、常に清潔でトイレペーパーの絶えることのない、ほぼ自動化されたトイレのことや、日本は清潔で民度が高いということ、繁栄した都市や便利でどこにでもあるドラッグストアのことなど、人に優しい日本のあれこれについて、周りの人に伝えたい。忘れられない思い出が一杯で、ぜひまた来てみたい。

○ 最も印象的だったのは、日本のきめ細かさ、物事に向き合うときの几帳面さ、独創性である。これはほんの些細な事柄からも見てとれる。

①きめ細かさ：日本では手指の洗浄液や消毒液がどこにでも置いてある。道端の桃を売る露店でも、おじさんが試食させてくれた後、なんとお手拭を用意してくれたのだ。店で道を尋ねれば、店員は行きたい場所に連れて行ってくれる。方角だけ指差して終わり、ということは絶対にない。

②几帳面さ：参加した YOSAKOI ソーランは、日本の大学生にとって必修科目ではないのに、一生懸命努力していることがよく分かった。この8日間、日本側の先生方やガイドさんは、暇さえあれば指示を出したり会議をして、行程中に問題になりそうな事柄について特に入念に準備してくれた。

③独創性：目の前に現れた東京藝術大学のオーケストラピットは、位置による用途のバリエーションが多く、とても特別だった。観客席の一部が沈むとオーケストラピット

に変わり、上昇して舞台とフラットになった後、ローラー付の椅子を撤去すれば、舞台はオーケストラピット分だけ広がる。日本人は、思いもよらないような方法で合理的に資源を利用するのだと、今回日本に来て一番強く感じた。

日本に友好訪問できるチャンスに恵まれ、本当に嬉しい。もともとイメージしていた日本に加えて、新しい日本の顔も発見できた。両国が今後も協力し合って平和友好交流を続け、中日の友情がずっと続いていくことを願っている。

○ 中日戦争への歴史認識によって、私は日本と日本人に対し、マイナスイメージや偏見を持っていた。しかし今回の交流活動に参加して、それ以上にプラス面や評価できる点を感じた。国民全体の民度の高さ、友好的でもてなし好きの国民性、経済と文化面での実力と影響力、環境や生態系保護への取り組みの素晴らしさ、最先端のモードなどを理解し、全く新しい日本認識を持つようになった。

北海道大学合唱団との交流では、音楽専攻ではない学生達が学業の合間に音楽に親しみ、しかもプロ並みのレベルに達しているのはすごいと感じた。札幌コンサートホールKitaraでは、現地の中学生の素晴らしい演奏を目の当たりにし、日本の若者の音楽レベルの高さを感じた。北翔大学でのYOSAKOIソーラン体験では、日本の伝統文化に触れただけではなく、大学生の情熱と活力を感じることができた。東京藝術大学訪問では、学習環境やハード面での施設はもちろん、学生の専門レベルの高さの面でも、日本の音楽教育における最高傑作を理解することができた。

今回の交流では、緻密でプロ意識に富み、熱い心で上を目指そうとする日本の若者の姿勢を感じた。これは、日本国民全体の民度の高さや礼儀正しい国民性と切り離すことはできないものだと思う。

○ 今回の活動を通じて、日本の環境の良さ、耐震施設が整備されていることに驚いた。中日関係は緊張状態にあるが、日本の大学生は親しげに私達と会話し、交流してくれた。行く先々のスタッフの対応やサービスも友好的で、私達の疑問に詳しく答えてくれ、日本人が人やものに向ける優しさを感じた。

中日の音楽交流や日本の文化・環境体験を通じて、若い世代に足りないのはより多くの交流だと感じた。交流が不十分であれば、両国間の問題の処理の仕方はどうしても過激になりがちだ。もし、国と国とが文化、教育、音楽などの分野でもっと交流できれば、中日の関係改善がもっと進むと思う。今回の交流が感動的で、楽しかったことは言うまでもない。自分と同年代の人達と交流したときの素晴らしさは言葉では表現できない。今回の交流活動に感謝し、中日関係の改善を心から願っている。そして、音楽と笑顔があれば誰もが共に歩むことができるのだという気持ちを持って、この喜びを分かち合いたい。今回の交流と、そのために力を尽くして下さった先生方に改めて感謝したい。

○ 今回の音楽交流活動を通じて日本への理解がより深まった。以前見た報道で、日本は非常に近代的な国だと言っていたが、実際に来てみて、近代的な施設や高度に自動化された生活施設などを実感した。参加前は、日本人というのは用心深くて融通が利かないという強固なイメージがあったが、実際触れ合ってみると、何事も細部にまで完璧を求めることが、最も基本的な職業習慣とプロ意識からくるものだということが分かった。

音楽交流では、日本と中国は音楽文化の源を共有しており、それは唐代の雅楽だと分かった。日本の音楽は、こうした古くて貴重な音楽文化の継承に並々ならぬ貢献をしていると思う。今後チャンスがあれば、この貴重な音楽を学びに来たいと思った。そしてこれを一つの絆として、中日両国の伝統民族音楽を学ぶ青少年の間で、相互交流と相互学習を促進し、共に発展できればと思う。

○ 今回代表団として訪れた東京と札幌では、礼儀正しい日本人が優雅に暮らし、その謙虚でありながら自信に満ちた姿や、高い文化レベルと優雅さにとても心が落ち着いた。過去の意識調査では、日本は中国人が最も好きな国だった。日本の環境の良さと民度の高さには非常に敬服する。日本人は謙虚で憂国の情を持っていたため、世界屈指の先進国となったのだと

思う。

最も印象深かったのは、サントリーホールバックステージツアーだ。サントリーホールのプロ仕様は誰もが認めるところで、細部にまでこだわりがあり、便利で行き届いたデザインと、音楽ホールとしての専門性に感動した。クラシック音楽を学ぶ一人の若者にとって、更に忘れがたいのは日本の進んだ素晴らしいクラシック音楽の文化だ。パシフィック・ミュージック・フェスティバルを見学して、全国民がクラシックを愛するという素晴らしい雰囲気、日本でそれが発展した条件なのだと思います。日本のクラシック音楽文化は、サントリーホールという優れたハード面だけに表れているのではなく、濃厚なクラシック音楽の鑑賞環境にも表れていた。

数多くの著名な音楽家がかつて日本で演奏し、多くの貴重な映像資料を残している。クラシック音楽の継承者である私達もそれに貢献しなければならない。我が中国では、クラシック音楽はまだ高度成長期にあり、1950年代から60年代の日本に似ているが、近い将来、中国と日本はアジアのクラシック音楽繁栄の2大国になるだろう。このような時代に音楽を学ぶ私達はとても幸運だ。

○ 初めての日本。これまで中国国内で見聞きした日本の報道はマイナスのものが多かった。でも日本にいる親戚はいつも、日本はこんなに素晴らしいよと宣伝していた。今回実際に来てみて、それが本当だったと感じる。以下、自分の感じたことを述べてみたい。

まず新宿御苑を散策して、日本の近代文化の雰囲気を味わった。環境の優美さ、異国情緒にあふれ、小さな場所にこれほど多くの草花が茂っていることに、本当に驚いた。サントリーホールでは、世界一流の音楽ホールの音響効果、特にピアノの音響効果を体験することができ、非常に驚いた。日本の民族音楽に関するセミナーでは、民間音楽の発展経緯を理解することができ、素晴らしい尺八の演奏にも触れ、溜息が止まらなかった。北海道大学合唱団との交流では、アマチュア合唱団なのにこんなに人の心を打つ演奏をするのかと恐れ入った。パシフィック・ミュージック・フェスティバルでは、世界トップレベルの演奏家のパフォーマンスをこの目で見ることができ、日本の小学生のマーチングバンドの素晴らしい演奏も楽しんだ。羊ヶ丘展望台では、ここにしかない日本の牧場の風景を堪能した。それから、YOSAKOIソーランの体験で出会った北翔大学の学生達のチャーミングなこと！彼らと一緒に踊って本当に楽しかった。日本の温泉も体験し、日本文化も体感できた。感じることはたくさんあったが、その中心を占めるのは、日本がたくさんの驚きや感動、名残惜しい気持ちを与えてくれたということ。また、日本の文明、民度、環境、食べ物、科学技術には学ぶべき価値があり、音楽に国境はなく、音楽があればコミュニケーションできるということだった。

○ 日本に来る前、日本は街が清潔で民度がとても高いと友達から聞いていた。今回の活動で日本を多面的に理解することができ、伝統文化だけでなく経済面でも以前より深く理解することができたと思う。日本は伝統文化への保護意識が強く、日本人と触れ合ってみて、非常に礼儀を重んじ実直であることが分かった。また、生活の中には国産の電化製品が溢れていて、日本人の自国の技術とブランドへの自信が見て取れる。

北海道大学合唱団はアマチュアの男声合唱団だが、専門的に見ても非常に重厚なバスの響きを兼ね備えており、とても感動した。彼らが日々生き生きと情熱を持って生活している様子が感じられ、心が温かくなった。本業の学問以外の場でこのような団体を組織していることに感心し、中国もこうした方法を参考にすれば、国内のアマチュア楽団のレベルアップが図れるのではと思った。

パシフィック・ミュージック・フェスティバルのオープニングセレモニーには、世界トップクラスの音楽家が集ったが、一番印象的だったのは子供達の演奏だった。日本の小学生達の生き生きとした様子、ユニークで新しいパフォーマンスを見て、音楽教育における人間性の育成について理解することができ、子供の特性もよく表現されていたと思う。

北翔大学でのYOSAKOIソーラン体験では、自国の伝統文化の保護と伝承について学ぶべき点が多かった。北翔大学の学生は私たちを歓待し、丁寧に踊りを教えてくれ、今の日本の大学生の持つ積極的な向上心を垣間見ることができた。

東京藝術大学の演奏と奏楽堂からは、日本が伝統的な西洋音楽を重視していることが分かったほか、その音楽の専門性の高さを感じた。

○ 今回の活動に参加して、日本や日本人に対する理解が深まった。日本は礼節の国だというのは正にその通りで、日本人は本当に礼儀正しく、民度も高かった。また、音楽や文化についての理解も深まった。日本は中国同様魅力の尽きない国だった。

本当に音楽には国境が無いということを、今回一番強く感じた。コンサートホールやパシフィック・ミュージック・フェスティバルの見学、演奏や踊りの交流、街並みや自然の景観もすべて、深く私の心を打った。日本と日本人へのイメージが全く新しいもの変わった。サントリーホールと東京藝術大学奏楽堂を見学して、設計者の細かい気配りと知恵に感心した。一つ一つの設計デザインが出演者と観客本位になされている。北海道大学合唱団との交流では、音楽を熱愛するアマチュア大学生に敬服し、彼らの音楽を愛する気持ちに深く感動した。北翔大学の仲間達との交流が一番楽しかった。踊りって素晴らしい！YOSAKOI ソーランはわが国の民族舞踊に通じるものがあつたせいか、やってみるとすぐに親しみを感じた。最後の訪問先である東京藝術大学で、中日双方の学生で合唱した「わたしは未来」には本当に感動して血が沸き立つ思いだった。音楽に国境は無い。両国の友情が末永く続きますように！

○ 二つの出来事がとても印象に残っている。7月9日成田に着いてすぐ心地よい気持ちになった。すべてが秩序正しく、イミグレーションでの整列から笑顔を絶やさぬ係官に至るまで、とても満足できた。バスまでカートを押して行くと、埃ひとつないバスに驚いた。中国では新車でなければこんなことはあり得ない。バスのドライバーさんは小柄だったが、強烈に印象に残っている。中国のドライバーは、お客に自分で荷物を積むように言うが、このドライバーさんはさっとバスの中に入り、しゃがんで私達の荷物を積んでくれたのだ。これには驚いたし、申し訳ない気持ちになった。その後何度もドライバーさんは変わったが、驚いたことにみな同じように誠実にサービスしてくれた。このような質の高いサービスは、日本の民族文化や教育と切り離しては考えられないと思う。日本は生真面目さという点でドイツに似ている。謹厳実直で緻密である。何日か滞在してみて、この真面目さと謙虚さは学ぶに値するものだと思うようになった。今後の自分の生活や学習にも取り入れたい。

もう一つは、7月11日の午後、芸術交流でのことである。私達はベルリン・フィルハーモニー・ブラスアンサンブルが札幌の中学生に金管楽器クリニックを行う様子を見学した。驚いたのは、わずか14歳ぐらいの中学生が、プロにも引けをとらない演奏をしているということだった。これには本当にびっくりすると同時に感心した。中国の中学生が同じレベルに達するには、おそらくまだ十数年はかかるだろう。もちろんこれは日本の教育のなせる技で、子供達は小さいときから自分の将来を考えて、早い時期から音楽を習い始めるのである。今回のような交流活動を通じて、より多くの平和と音楽を熱愛する若者に日本を理解してもらい、両国の青少年がより良く、より長く友好が続けられるよう願っている。また日本を訪れたい。

○ 交流活動に参加するまでは、歴史のことがあつたので、日本と日本人にはずっと偏見を抱いていた。でも実際来てみると、日本人はとても友好的であることが分かって、色眼鏡で見えてはいけないのだと思った。

筒石賢昭国学院大学教授・東京学芸大学名誉教授によるセミナー「日本の伝統音楽についてー中国音楽との関連から」では大きな収穫があつた。声明と雅楽、雅楽の三類型、能、文楽、歌舞伎の他、日本の三つの伝統楽器である箏、三味線、尺八の種類と歴史について知ることができた。日本の箏と中国の古箏は非常によく似ており、尺八と縦笛も類似点が多い。みな唐代に日本に伝わり広まったという。筒石賢昭教授による尺八の生演奏はとても素晴らしく、大いに興味を持った。次回は是非筒石教授に教わってみたい。

一昨日の北翔大学での交流では、彼らに踊りを教えて貰った。私たちはみなやる気満々で積極的に取り組み、北翔大学のみんなもとても一生懸命教えてくれたので、あつという間に踊りをマスターし、お互いの友情も一気に深まり、とても良かったと思う。